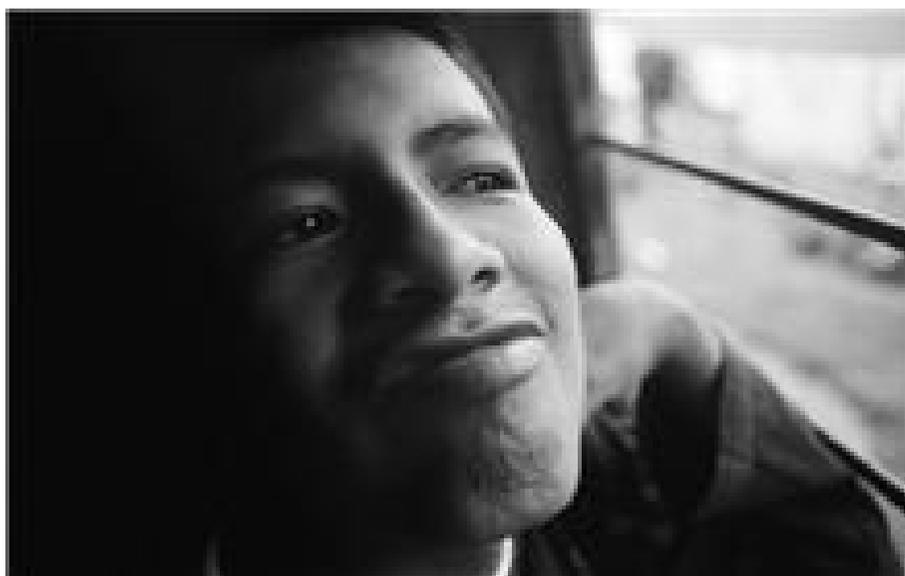


S O N R I S A

そんりさ

Vol.127



(マウロ 2007 柴田大輔撮影)

コロンビア・先住民族の少年マウロ

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- 2 コロンビア 先住民族の少年マウロ：柴田大輔
- 8 コスタリカ、米軍を受け入れ：足立力也
- 10 コレア大統領来日とヤスニ・イニシアティヴ：青西靖夫
- 13 アルゼンチン 貧者の麻薬「パコ」が蔓延：山本昭代 訳
- 14 音楽三昧♪ ペルーな日々：水口良樹
- 18 ニュースクリップ

コロンビア 先住民族の少年マウロ

柴田 大輔

コロンビア南部カウカ県の、アンデスの山々に囲まれた五〇軒ほどの家が立ち並ぶある集落に、マウロと言う先住民族の少年が住んでいる。そこはコーヒの深い緑色の葉と、太陽の光を照り返す鮮やかな黄緑色のコカの葉が、山肌を覆う。麻薬の原料としてのコカ栽培の盛んな地域では、紛争の中に多くの住民が巻き込まれている。話の中に登場する人達への影響を考え具体的な地名は伏せることにした。コロンビアで生きる、ごく普通の家族の身近に起きている出来事を話したい。

1. マウロとの出会い

二〇〇七年、当時コロンビアに滞在していた私は、先住民族の生活を知るため、コロンビア国内でも先住民族が多く暮らすカウカ県の、アンデス山中に点在する先住民族コミュニティを訪ね歩いてきた。標高約二八〇〇メートルに位置するコミュニティの私が居候をしていた家庭に、その時一四歳のマウロがパンパンに膨らんだリュックを背負って、一二歳の弟アレクシスとやってきた。二人はその家庭の奥さんの弟だ。

二人は、コミュニティから山道をバスで六時間ほど下った「ソナ・バツハ（標高の低い地域）」と呼ばれる温かい地域で両親と暮らしていた。ところがある日、父親がバイクで事故を起こし、足を折る大けがを負う。そして手術を受けるため、彼らが住む集落から車で丸一日かかる国内第二の都市カリの病院へ運ばれる。そ



ふざけるマウロとアレクシス。居候先の家で、マウロがよく弟の面倒を見ていた。(2007年)

ここで手術を受けた父親は、通院のために病院近くに暮らす友人宅に部屋を借りることになる。母親も父親の身の回りの世話をするため力へ

向かった。残されたマウロたちは、父親の状態が良くなるまでお姉さんの家に預けられたのだ。私が居候しているときに彼らはやってきた。それから二人とは、二カ月ほど同じ屋根の下で生活することになる。

2. 父への思い

面倒見のいいマウロは、弟のアレクシスといつも一緒に遊んでいた。サッカーが大好きで、応援するプロチームの試合がある日は二人びたテレビドラマで、エッチなシーンがあると「ノー！」と言いながらアレクシスの顔を手で覆い、二人でよくじゃれあっていた。また、テレビなどを通じ日本の事を知っている二人は、夜になると私の寝床に来て世界地図を手に話を聞きたがる。そんな彼らに日本の話や言葉を教えたりしていた。私はとても懐いてくれる二人の事が、徐々に本当の兄弟のように思えていった。また、たどたどしいスペイン語の私に、大人が話す難しい言い回しを分かりやすく言いなおしてくれるスペイン語の先生でもあった。

家の中では、毎日楽しそうに過ごすマウロだったが、事あるごとにつっかかってくる時があった。そんな彼を初め理解できず、ムキになってしまったことがある。彼は初めて両親と離れて暮らすことや、まだ友達の少ない慣れない土地での生活にストレスを抱えていたのだ。弟の前で必要以上にしつかり者として振舞おうとしていたのかもしれない。話を聞くと、普段弱音

を吐かない彼が、両親に会いたいと漏らす。ほとんど親と連絡を取らない私は、「子供の時に誰がご飯を作って、服を洗ってたと思ってるんだ！」と彼に叱られてしまった。

学校が長期休暇に入ったとき、居候先であるマウロのお姉さんに頼んで、二人を彼らの両親が暮らすカリへ連れて行くことにした。

お姉さんから借りた携帯電話で両親と連絡を取りながらバスを乗り継ぐ。途中で車に酔ってしまったアレクシスを介抱しながら、道順を誘導していくマウロ。お金は払うがマウロの後ろをついていく私。まったくどつちが大人なのか分からない。



マウロの家族。事故にあった父親（左側）の足が痛々しいが、家族で過ごす時間を皆で楽しんでいる。（2007年）

朝五時のバスで出発し、カリに着いたのはもう日が暮れてからだった。両親の顔を思い浮かべ、嬉しさを顔に表す彼らを見ると、私も明るい気分になってくる。久しぶりに会う両親は、住宅街の友人宅のひと部屋を借りて暮らしていた。「こっちがオレのお父さんで、こっちがお母さんだよ。」と私に両親を紹介するマウロの顔には、子供らしい無邪気な笑顔が溢れていた。お父さんの足には、折れた脚を固定するためにボルトが埋め込まれ、脛から突き出した金具がとても痛々しかったが、彼も久しぶりに会う子供たちを目の前にし、笑みがこぼれていた。

3. 目の当たりにした現実

その後、村に帰り再び一緒に生活していたある日、午後の柔らかい太陽に照らされた谷間の村に銃声が響きわたる。単発だった音が次第に連続した激しいもの変わっていく。初め何が起きているのかわからなかった。台所では圧力鍋から漏れる蒸気の音、屋上の洗濯場からは、服を手洗いの音と水道から流れる出る水の音が聞こえる。日常の音が、外に響き渡る銃声とあまりにアンバランスで、まるで夢の中のように現実感がない。しかし、子供たちはテレビの前に体を寄せ合い、集落に駐屯するゲリラの警察部隊が路上を走り回るのを目に入る。警察が駐留する建物に対して、谷を挟んだ反対側の山からゲリラが攻撃を仕掛けてきたということだった。初めて聞く銃声に混乱した私は、家中を右往左往するばかりだった。ここでも子供

たちに「何でもないよ、ファイエスタ（お祭り）だって、落ちつけよ！」と励まされる。しかしパニックになった私は、そのままカメラを片手に外に飛び出した。一時間ほどで銃声が鳴りやむ。興奮し放心する武装した警察たちの傍らを何事もなかったかのように畑仕事の道具を担いだ住民がバイクで横切り、路地では子供たちがサッカーをしている。

家に戻ると、住み込みで家事をしている女性が洗濯をしながら尋ねる。「ダイスケ怖かった？」もちろん怖かった。パニックになり外を走り回るだけで写真を撮ることもできなかった。

台所で料理をしている奥さんに「こういうことはよくあるの？」と聞いた。彼女は、「二〇〇三年に警察がこの村にきたの。それまで村に警察はいなかった。その代わりゲリラが村の中を歩いていて。車やバイクを盗まれる人もいたのよ。でもこんなこと（銃撃戦）はなかった。警察が来てからよ、こんな事が起きるようになったのは。」と言う。もつと詳しく聞こうとする僕の話に「もういいでしょ。」と一方的に遮った。

私は強く頭を殴られたようにクラクラしていた。それは初めて目の当たりにする戦闘のシヨックだけではない。僅かの滞在で村の一員になった気味でいた私は、戦闘の間も営まれる日常に、どうしようもなく他所者であることを思い知らされた。

ここで私は何がしたいのだろうか。この時ほど、自分と現地の人たちとの距離を感じたことはない。

4.少年の葛藤

マウロはよく「Japon esta bueno! Colombia esta maloi(日本はいい国だ!コロンビア最悪!)」と冗談めかして言っていた。「なんでそんなこと言うの?」という「何でもないよ、そう思うだけ!」と返ってくる。

ある日の夜、部屋で私と二人きりになったマウロが、「これはみんなに話しちゃ駄目だからな、」と前置きして大切な話をしてくれた。まだ一年もたない前年、生まれて間もなかった彼の弟が流れ弾に当たって亡くなったという。「今はまだとても悲しくて、家族の間でこの話は誰もしない。」想像もしていなかった話だった。彼の口ぶりは淡々としている。いつもと変わらぬ表情で話すマウロの気持ちをつかみ切れずにいた。唐突に切り出された話しの重さに、私の顔は困惑していたのかもしれない。そんな私の様子を察して「やっぱり今の話は忘れてよ。誰にも言っちゃ駄目だよ。」と、彼は明るい顔を作った。どういふ気持ちで私に打ち明けてくれたのだろう。私は彼の言葉を受け止められず、そのまま部屋を出ていくマウロにそれ以上話を掘り下げて聞くことができなかった。

マウロが一度だけ歌ってくれた歌がある。「インディヘナ(先住民族)はいつも泣いている。悲しくて辛くて泣いている。」という内容だった。その時の寂しそうな彼の顔が印象的だった。また彼は「都会に住んで白人みたいに暮らしたい」とも口にしていった。

私は当時、先住民族の暮らしがどういふものか知りたくてそこにいた。普段の会話の中で「インディヘナ(先住民族)にとってこれはどういふ事?」という様に、「インディヘナ」という言葉を無造作に使っていた。ある日、アンデスの民族音楽をよく聞いていた私に「オレはインディヘナなんか嫌いだ!」とマウロがぶつかった。彼はレゲトンというプエルトリコ生まれのダンスミュージックが好きで、よくそのビデオを見ていた。画面には、ビルが立ち並ぶ都会の風景と高級車、派手な格好で歌い踊る男女が映る。そのイメージは山で生活する彼らと正反対のものだ。彼の心には、若者が単純に抱く都会へのあこがれではない複雑な思いがあるように思えた。



「ちょっと撮ってよ」と、もみあげを細くする、流行の髪型でおしゃれをするマウロ。

マウロは民族の言葉を知らない。民族音楽も民話にも興味がない。伝統的な儀式にも「あんなのウソだね」と言う。それでも外の人間は自分たちの事を「インディヘナ」と呼ぶ。じゃあオレ達とお前達たちの違いは何?もしそう聞かれたら、私は答えが見つからない。

その後もマウロは、自分たちの事、故郷のことを少しづつ自分から話してくれた。

マウロの暮らしていた場所には警察も軍も常駐していない。そこは麻薬を収入源とするゲリラの影響力が強い地域だ。加熱する危険な場所という意味で、「ソナ・ロハ(赤い地域)」と呼ばれる。まさに政府が進める麻薬・ゲリラ撲滅作戦の最前線といえる。

集落にはゲリラや軍が入りし、頻繁に起きる戦闘のなかで犠牲になる人々がいる。

彼が住んでいた地域はコカ栽培の盛んな地域だという。それは麻薬の原料としてのものだ。彼の家族もコーヒーとともにコカを栽培することで生計を立てている。家族でコカの葉の収穫し、精製所で、ペースト状にする。集落にはマフィアが住んでおり、麻薬取引を管理している様だ。マフィアを手伝い、靴の底にコカインペーストを忍ばせ町へと運んでいた父親の事、収入のために軍隊に入っていた彼の兄が、そこで麻薬を覚え刑務所に入れられていた事を、話しづらそうに私に教えた。また、麻薬で狂った軍の兵士が銃を乱射したこと、住民の物を盗んだゲリラ兵士を別のゲリラが処刑したこと、衝撃的な事を普段と変わらぬ口調で話す。タバコを吸う私



カカの苗木。マウロたちの家族の生活する場所では、多くの人がココアとコーヒーで生活を営む。

に「タバコにはコカインが入ってるんだぞ、やめるよ!」と言い、「神様は全部見てるんだ。オレはタバコも酒も絶対にやらない!」そう強く話す。

マウロの中には、先住民族、麻薬と暴力、家族の死、全てが一つの線につながっている、そんな思いがあったのかもしれない。

私の中に一四歳の少年と話をしているという意識はもうなかった。一人の人間として発する言葉の一つ一つに込められた思いが何なのか、精一杯感じようとした。彼の過ごしてきた日常を知らない私には、そうすることでしか彼に答えられないと思った。

5.再訪

日本に帰国し、半年後に再びコロンビアに渡り村を訪ねると、マウロとアレクシスが元気に迎えてくれた。この頃には父親の状態も良くな

り、月一回へと通院の間隔が伸びていた。そのため、病院のある都市からもう一人の娘、オルガが暮らす別の町のアパートに越していた。マウロたちも学校が長期休暇になるのをきっかけにその町に家族で暮らすようになる。山と違いとても暑いこの町で、六畳ほどの部屋に家族五人が暮らす様子は窮屈そうに思えたが、それよりも家族と一緒に暮らせる幸せを皆が噛みしめているようだった。後に、当時妊娠中だったオルガに息子が生まれ、家の中に明るさが増していく。

私はどうしても彼らの故郷に行きたかった。

マウロがこれまでどんな思いで生きてきたのか、彼らが見てきた風景を見ることで共有できる思いがあるのではないか、その思いが日に日に強くなっていた。しかし、それにはカビルドの許可が必要だ。

先住民族社会ではカビルドと呼ばれる評議会がコミユニティーを取り仕切る。どの村でも、まずカビルドに来訪の理由を話し滞在の許可を得る。それは、自分たちの生活圏を守るための仕組みだろう。また、私の様な他所からの人間は、カビルドの許可を得ることで、紛争地域で軍・警察に対して、自分はゲリラではないと信用を得られる。先住民族社会を尊重するといわれるゲリラに対しても、カビルドと通じているということなどで危害を加えられる恐れが減る。しかし、外国人の出入りがない場所では、軍事組織の不信を招く危険が伴うため許可が出にくい。それでも、「私たちが村に帰るときには一緒

に行つてグララーポ(サトウキビの地酒)を飲む」と言ってくれた。

6.マウロの故郷を訪ねる

三度目の訪問となった二〇〇九年八月、マウロたちは故郷の村に戻っていた。電話をすると、父親は足を固定していたポルトが抜かれ、山を歩けるまでに回復したと言う。オルガも子育てのため、一緒に村に帰っていた。皆が元の生活を取り戻していたことが、自分のことのように嬉しかったが、一方で今度いつ会えるのか分からないという寂しさがよぎった。

ある日、マウロたちが暮らしている集落から山一つ挟んだ所に暮らす知人を訪ねる機会があった。そこは住民の数が少なく、コカ栽培の規模も小さいため紛争が少ない。マウロの親戚も住んでおり、彼らが元気に暮らしている様子を伝え聞くことができた。深い谷に挟まれたその集落は、山の斜面にまだ青い実をつけたコーヒーの木がびっしりと並んでいる。無農薬で作られる立派なユカ芋や熟れたオレンジをたべながらのんびりと過ごしていると、マウロのお父さんが犬を連れてフラリとやってきた。「元気でやってるか?」私が来ていることを聞いて、山道を一時間以上歩いて会いに来てくれたのだ。あまりの嬉しさにいつもより握手に力が入る。以前の杖をつきながら歩く姿はもうなく、日に焼け締まった顔つきから、本当にもう良くなったのだと感じた。しばらくそこで話をしていると、「今から家に行つてみるか?」と言



マウロが生まれ育った村。紛争の最前線に立たされている。

う。でも、いいのだろうか。カビルドは何と言っているのだろうか。彼は「別にいいよそんなこと。俺の作るユカ芋が見たいだろ？」あつげらかんとしたその言い方に思わず笑ってしまった。もちろん断るはずがない。「バモスニさあ行こう！」と言つて彼の後をついて行つた。前回彼らに会つてから一年半以上が経つ。頭の中をみんなの顔がよぎる。

山道を登りきつたところから、彼らの暮らす集落が見えた。山々に囲まれたそこだけお皿のような平坦な場所がある。そこに五〇軒ほど家が立ち並んでいる。マウロたちの家はその中心から少し離れた、山の斜面にあると言う。残り半分の道のりは、やけに足取りが軽くなった。

コーヒー畑の中を通る小道の先に家が見え

る。家に着くと、マウロの母親とオルガ、三歳になり歩けるようになった彼女の息子に迎えられる。マウロとアレクシスは広場でサッカーをしていて家にはいない。自家製の甘いコーヒーとパンで少しゆつくりした後、広場へ行ってみる。夕方の沈みかける太陽の中で、友人たちと汗だくになってサッカーをする二人がいた。「オーラー」と声をかけると、「こつちのチームに入つてくれよ！」といきなり私もボールを追いかけることになった。あつという間に汗だくになり、へ口へ口になりながら日が沈むまで子供たちに混じつて遊んだ。一七歳になったマウロは少し背が伸び、顔つきも大人っぽくなつていた。もうすぐ一五歳になるアレクシスは「ハラヘッタ！ハラヘッタ！」と、声変わりした低い声で以前教えた日本語を口にした。再び会えたことがとてもうれしかった。

家に戻つて一緒に夕飯を食べながら話をする。再び家族と一緒に暮らせる事がどれだけ二人にとつて幸せなことなのだろう。特別な話をしていたわけではないけれど、食卓に漂う穏やかな空気から、彼らが安心した生活を送っているように感じた。

夜が更けてくると、あたりが大分涼しくなる。食事を終え、温かいアグアパネラ（お湯に黒砂糖を溶かした飲み物）を飲みながらマウロ、オルガと三人で話をしていった。その時、「ブーン」という低くくぐもつた音が夜空に不気味に響き渡る。何だろうと思つていると、「フィエスタ（お祭り）が始まつたんだよ。」と落ち着いた表

情でマウロが言う。すると、遠くから腹にずしりと響く「ズーン」という音がした。低空で飛ぶ軍の飛行機と、そこから落とされた爆弾の音だった。爆弾が落ちた場所はここから大分遠いようだった。ここ数日、山に潜伏するゲリラに対して軍の攻撃が続いているという。毎晩夜が更けてくると飛行機がやってきてゲリラに対して空爆が繰り返されている。

不気味な音が響く中、マウロもオルガも穏やかな表情のまま会話の続きを楽しんでいる。まるで何事も起きていないようだ。取返してそうしているのか、本当に気にしていないのか分からない。ただ、二人の雰囲気不思議なくらい私の心を落ち着かせていた。

ここでの生活は危険なはずだ。学校の屋根には白い旗が掲げられ、空に向けて学校の位置を知らせる「ZONA ESCOLAR」の文字が大きく書かれている。村の入り口には住民による二四時間の検問が設けられ、軍事組織に対して自分たちの主権を主張していた。

短い滞在の中で私が印象に残っているのは、使い慣れた場所家事をする母親、自分たちの畑で採れた作物を自慢する父親、住み慣れた家から学校へ向かう子供たち、それぞれが本来の居場所生活を送っている姿だった。毎晩、繰り返し響く飛行機と爆弾の音が、その姿をより印象的に浮かび上がらせていた。マウロに「両親と暮らせて幸せかい？」と聞くと、間髪いれず「あたりまえだろ！」と笑顔をかえしてくる。三日間の滞在で私はそこを離れた。別れの挨拶

「丸腰国家」の看板が問われる

「コスタリカ、米軍を受け入れ」 足立力也（コスタリカ研究家）

「史上初」の外国軍公式受け入れ

今年七月、コスタリカ国会は三一对八で米軍の受け入れを可決した。八月二〇日には、強襲揚陸艦イオウジマが大西洋岸のリモン市の港に接岸。一二月までに、四六隻の軍艦、二〇〇機のヘリコプター、七〇〇人以上の将校、兵士、軍属がコスタリカにやってくることになる。

外国軍の非公公式あるいは非合法な形や、単なる親善目的での訪問は、これまでもあった。しかし現地 *Al Dia* 紙は、「これだけ大規模外国の軍隊をコスタリカ本土に正式に受け入れたのは、一八二一年の独立以降初めてのことだ」と報じている。これは、今回の訪問に軍事的ミッションが含まれることを牽制する表現だ。

その実態はどうなのか。現時点で可能な範囲で調べてみた結果を報告する。

揺れ動く「理由」

今回の訪問は、「Continuing Promises」（継続的約束）という米軍の作戦の一環だ。これは、中南米・カリブ地域諸国に「必要なコミュニケーションサービス（医療など）を与える一方で、現地国軍に対して訓練を行う」ものだとされている。

（アメリカ南方軍サイト HYPERLINK "http://www.southcom.mil" <http://www.southcom.mil> より）。ハイチ、コロンビアに立ち寄ったイオウジマは、三方国目としてコスタリカを訪れ、その後グアテマラ、ニカラグア、パナマ、ガイアナ、スリナムを巡る予定だ。

コスタリカの公安省副大臣のマウリシオ・ポラスキーも、「これは『人道的ミッション』だ」と述べている（* *The Tico Times on line*、二〇一〇・八・二七）。

しかし、一連の報道によると、大きな目的のひとつとして、麻薬対策が挙げられている。コロンビアで生産された麻薬を米国に運搬するルートを途中で遮断するというのだ。

実際、これを口実に、米軍はこれまで何度もコスタリカへの入国を求めてきた。コスタリカ国内の反対でずっと実現してこなかったのだが、今回ついにその壁が破られた。国会で米軍の受け入れが承認された時も、麻薬対策が理由として挙げられている。

また、ラテンアメリカ諸国に広がりつつある反米政権に対する牽制とも受け止められている。ベネズエラのチャベス大統領は、さっそくこの動きに懸念を表明した。

実際、「人道支援」に、垂直離着陸可能なハリアー戦闘機まで搭載できるヘリコプター揚陸艦であるイオウジマや、実戦攻撃部隊である海兵隊が、なぜ必要なのかと問う声もある。少なくとも、ベネズエラなどの「反米政権」たちにとっては、彼らに対する牽制や、米軍によってコロンビアで展開される「コロンビア計画」のサポートと取られるだけの規模で展開しているのは間違いない。

盛り上がる報道、くすぶる反対派

これに対し、野党第一党である市民行動党など反対派は最高裁判所の憲法小法廷に違憲訴訟を起した。これは一審制で、判決には強制力があるため、ここでの判決が事実上の決着点となると思われる。

二〇〇三年、米国がイラク攻撃に際して挙げた「有志連合国リスト」にコスタリカの名前が載った時、違憲判決を下し、そのリストから名前を取り下げさせたのが、この法廷だ。しかし、その時とは事情が違うため、今回はどういった判断が下されるのか、不確定要素も多い。

イラク攻撃支持に関しては、九割以上の国民が反対していたが、今回は歓迎する向きも少ないようだ。

現在のコスタリカにおける最大の社会テーマは治安、麻薬、そして貧困である。米軍の「人道支援」は、これらの問題を解決してくれると

期待する向きもあるからだ。また、反麻薬運動の側からは「これは軍事作戦には当たらず、必要なことだ」という意見も出されている。政党や市民団体レベルでの反対運動も組織されてはいるものの、彼らのリーダーが期待したほどには盛り上がりが出ていないようだ。

ノーベル平和賞受賞者と、その後継者の選択

先に述べたように、この手の話はずいぶん前からあった。

二〇〇〇年、コスタリカと米国は、米国の軍艦を人道目的でコスタリカに寄港させることを含む条約を締結した。今回の訪問は、それに則ったものとされている。しかし、麻薬対策などはそれらの条項に当たらないため、反対派はこれを違法としている。政府側も、今回の寄港に関して、この条約に則ったものだから、いやこれはそれ以外の目的で、この条約とは関係ないだとか、発言にブレが見られる。

しかしこの案件は、実行段階で国会で否決されるなど、反対の声が強く、ずっと実現してこなかった。今回は、与党・国民解放党と、第三党である自由運動党などが国会で賛成票を投じたため、ついにコスタリカは歴史的転換点を迎えることになる。

一九八七年、中米和平交渉の仲介を評して、オスカル・アリアス前大統領にノーベル平和賞

今年2月の選挙で当確が出た直後の記者会見に臨むラウラ・チンチージャ大統領（撮影 足立力也）



任した。

アリアス氏はその二度目の任期中、国連で軍縮プログラムを提案するなど、世界の平和化に一定のアピールをしていた。その一方では、この計画を着々と進めていたことになる。

彼の所属する国民解放党が二〇一〇年の選挙で再び第一党となり、右派の国民運動党が第三党となった時点で、今回の米軍受け入れ議決は可決確実となった。アリアス氏の忠実な後継者と見られているチンチージャ大統領は、目論見通り、それを成し遂げたというわけだ。

九月上旬、米誌「タイム」は、「世界女性リーダーのラウラ・チンチージャ大統領を選んだ。米軍受け入れに対する感謝の念の表れだと言え、考えすぎだろうか。」

が授与された。

二〇〇六年から二〇一〇年まで、二期目の大統領職を務めあげたその後継者として、チンチージャ氏は今年二月に選出され、五月に就

驚くコスタリカ市民に問われる矜持

マスコミでは、リモンで米軍がいかに歓迎されているかが報道され、友好ムードを盛り上げた。米軍訪問先の病院を取材し、診察を受けた人の感謝の念を伝えた。しかし、それを真正面から受け入れる人ばかりではない。

首都サンホセ市を含む中央盆地には、三機の軍事ヘリコプターが飛来し、市民を驚かせたという。在コスタリカ米国大使館によれば、これらのヘリは、災害救助訓練や、急遽帰国を余儀なくされた米軍人をファン・サンタマリア国際空港へ運ぶために首都圏に飛来したということらしい。

そもそも、軍隊に慣れていないコスタリカ人にとつてみれば、驚くには十分な光景である。しかし、二〇〇三年の米軍イラク攻撃に当時のアベル・パチエコ大統領が賛成した時ほど、政府に対して反対の声を上げる人たちが結集している風はない。政府や国家ではなく、国民によってこの「丸腰国家」を作り上げてきたというコスタリカ人たちの矜持こそが今、問われていると言えよう。その看板を外すのも掛け替えるのも、また維持していくのも、彼らの判断次第だからだ。

先述のとおり、この件の最終的な結論は、最高裁判所・憲法小法廷に委ねられた。判決が出るには一年前後かかるだろうが、その間に市民レベルや政治レベルでどういった議論が展開されるのか、注視していきたい。

ラファエル・コレア大統領来日と ヤスニ・イニシアティブ

青西靖夫

九月六日、七日とエクアドルのラファエル・コレア大統領が多数の閣僚や国会議員とともに来日し、菅首相などと政府要人との対談に加えて、国連大学での講演、投資促進のための企業家との会合、広島訪問などを行った。大統領一行はその後韓国へ向かい、経済技術面における協力関係を深化させるとともに、ベネスエラとの合弁で計画されている、エクアドル太平洋岸のパシフィック精油所の建設を担う予定の「スダール」訪問などを行った。

日本政府の外務省のプレス・リリースを読むと、今回の訪日は日本からの投資促進と地デジ日本方式の採用のお礼が重要なテーマであったようである。しかしエクアドル政府の広報サイトでは広島訪問と核兵器廃絶への積極的な関与という側面も協調している。どうも軍縮や核兵器廃絶について積極的に発言していたのはエクアドル政府側のようにある。

さて、今回の来日で主要テーマの一つになると思われるのは、エクアドル・アマゾンにおける石油開発を放棄する提案であるヤスニ・イニシアティブである。(次ページ参照)

このイニシアティブへの資金を受け入れるのがヤスニ基金であるが、この基金がこの八月二

日に正式に発足したことに加え、今回の来日には、ヤスニ基金の担当大臣であるエスピノサ自然・文化遺産調整大臣も同行していることから、今回の訪問ではヤスニ基金への日本の協力が重要なテーマになると想定されたのである。

コレア大統領来日にあわせて、京都と東京ではヤスニ・イニシアティブについて市民集會が開催され、この計画の背景や意味について様々な意見が表明された。

脱石油の新たなモデルになるのか？

他の油田が開発されるだけではないのか？

気候変動への新しい対策となるのか？

単なる新しい排出権取引の仕組みとなるのではないのか？

地下資源を有さない国はどうすればいいのか？
などなど

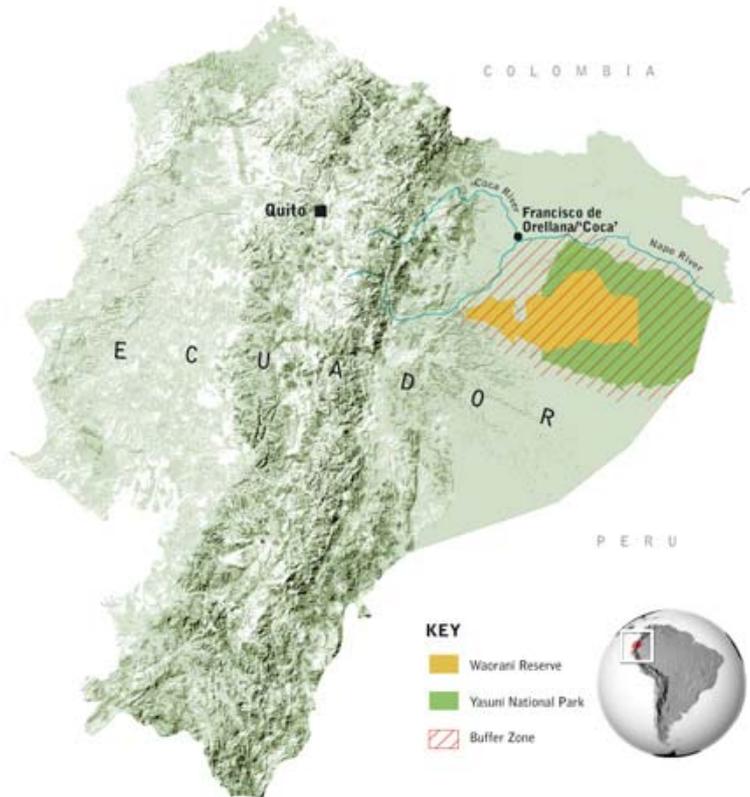
一方、コレア大統領は Contaminación Neta Eritada・回避された純汚染という概念を提示し、年末にメキシコのカンクンで開催される気候変動会議に働きかけていくとのことである。森林を保全することでは排出権を得ることが出来ないという京都議定書の限界の上で、「環境をきれいにする」ことと同様に「環境を汚さな

い」ことに対しても補償が与えられるべきであるという考えを推し進めていく意向である。この考え方と石油の開発放棄への代償を求めるヤスニ・イニシアティブは整合するのだろうか。

エクアドルは二〇〇八年に新憲法を制定し、自発的孤立にある先住民族のテリトリーを不可侵のものとして認め、採掘活動などの禁止を定めるとともに、「自然の権利」を認めている。先住民族の暮らすアマゾンの森を守るのは、エクアドルの人々が自ら担っていくことを宣言した重責である。国際社会から何ができるのか、それは私たちが話し合い、考え、実行すべき責任である。しかしこうした社会的な責任を「石油開発」と取引することに、個人的には違和感をぬぐい得ない。

Viva Yasuni!

石油依存社会に対するアマゾンからの挑戦 日本は今、エクアドルから何を学べるのか？



<http://www.landcoalition.org/cpl-blog/?p=4345>

Q:ヤスニ国立公園はどこにあるのですか？

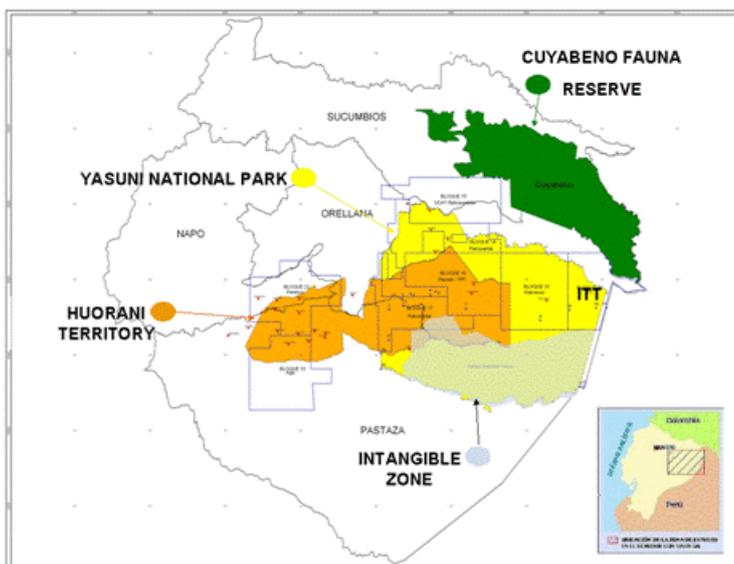
A:南米エクアドル国の東部のアマゾン地帯にある国立公園です。ヤスニ国立公園はエクアドルでも最も大きい保護区であり、約 100 万ヘクタールの面積です。

1989 年にはユネスコの「人間と生物圏計画」に基づく生物圏保護区に指定されました。

またこの地域には外界との接触を拒んで森での生活を続けている、タガエリ民族とタロメナニ民族が居住しています。

(憲法第 57 条で、孤立状態にある先住民族のテリトリーを伝統的占有であり、縮小できない、不可侵のものと定め、いかなる採掘/採取活動も禁止されています。)

Q:ITT って何ですか？



Courtesy: Alberto Acosta, Minister of Energy & Mines, Ecuador. "Yasuni, fofjando el camino hacia lo imposible. Dejar el crudo en el subsuelo." University of Maryland video conference, May 23, 2007.

A: ITT はヤスニ国立公園に重なる形で設定されている石油開発鉱区の名称で、1992 年に行われた試掘力所

Ishpingo, Tambococha, Tiputini の頭文字を取って名付けられました。ITT 鉱区の地下には、8 億 46 百万バレルの重質原油が存在すると見込まれています。

この他にも、ヤスニ国立公園内には 31 鉱区や 14,15,16 鉱区などが重なっています。31 鉱区の権益は、ブラジル国営石油会社からエクアドル国営のペトロ・エクアドルに移行され、既に開発に向けて動いているとのことである。

15 鉱区は、米国系のオキシデンタルとの契約を解除し、エクアドル国営企業の管理に移されましたが、日産 10 万バレルとエクアドルでも重要な油田となっ

ています。

ちなみに、ITT の東側のペルー側でも石油開発は進んでおり、コロンビアとエクアドルに挟まれる地域、第 117 鉱区に

は日本の石油企業も権益を有しています。今後、ペルー側とエクアドル側の石油開発がリンクしていく可能性もあると思われれます。

Q:ヤスニ-ITT イニシアティブとは何ですか？

ITT 鉱区に存在すると想定される 8 億バレルの原油開発を放棄することで、その原油を燃焼させた際に生み出されたであろう 4 億トンの二酸化炭素の排出を防ぎ、気候変動対策に貢献しようというものです。

更に原油開発を放棄することで、生物多様性を保全し、自発的孤立を選んでいる先住民族の生活を守ることができません。

Q:国際社会との関係は

この提案は、地球温暖化に対する新しい、革新的な提案です。エクアドル政府は原油開発を放棄するかわりに、国際社会に対して、原油開発から見込まれる収入の半分の負担を求めています。

そのためにヤスニ-ITT 信託基金(ヤスニ基金)を設置し、各国政府や国際機関、企業などに対して拠出を求めています。

Q:ヤスニ基金はどのような仕組みになっているのですか？

ヤスニ基金の資金管理などの実務は国連開発計画によって行われます。既に国連開発計画とエクアドル政府との間での協定も結ばれています。この基金の利用に関する意思決定は、エクアドル政府代表者 3 名、拠出国政府の代表 2 名、エクアドル市民社会の代表 1 名で構成される執行委員会で行われます。

Q:ヤスニ基金への拠出金はどのように利用されるのですか？

ヤスニ基金は次の目的に利用されることが定められています。

- a) 森林破壊の防止、生態系特に自然保護区国家システムの保全
- b) 植林、森林回復、自然更新、森林の適正管理
- c) 再生可能エネルギー、エネルギー利用の効率化
- d) このイニシアティブの影響地域における社会開発の促進
- e) 関連分野における調査研究、技術革新

各国政府などからの拠出金やヤスニ保証書(CGY)の売却による資金は、水力、地熱、風力、太陽光などの更新可能なエネルギー開発に投資されます。

この投資に対して毎年支払われる資金が保護区の保全や、森林保全などに利用されることとなります。

Q:ヤスニ基金へは個人でも寄付できるのですか？

個人でも寄付はできます。但し、定められた金額以下の場合には、ヤスニ保証書は発行されません。

Q:エクアドル政府が、ITT の原油開発を始めた場合にはどうなるのですか？

ヤスニ保証書が有効となります。ヤスニ保証書には利子はありませんが、原油開発を始めた場合には、拠出金額に対する保証書となり、エクアドル政府が拠出金を返還することとなります。

Q:ヤスニ基金はもう始動しているのですか？

2010 年 8 月 2 日にエクアドル政府と国連開発計画との間で調印がなされ、ヤスニ基金の設置が実現しました。エクアドル政府は国際社会に対して 13 年間に 36 億ドルの拠出を求めています。また 2011 年末までに、少なくとも 1 億ドルの拠出を求めています。

制作:開発と権利のための行動センター

アルゼンチン

貧者の麻薬「パコ」が蔓延

バレリア・ペラソ

BBC Mundo

2010年7月6日

その麻薬はブエノスアイレスの貧民街の街頭で二ドル以下で手に入り、みな真昼間から吸っている。中毒になった子どもや若者、女性たちはやせ細り、手は黒ずんでいる。「パコ」と呼ばれるその薬物は、今日アルゼンチンの公衆衛生において頭を悩ませる問題である。

パコは、別名コカインの原料ペースト、ペース・ペースト、あるいはBBCとも呼ばれる。この麻薬が、アルコールに次いで多くの人々が救急搬送される原因となっているのである。

ブエノスアイレス市の調査によると、昨年度病院に救急搬送された患者のうち二・九%がこの薬物の中毒によるものだった。この数字自体は大きなものではないが、ひとつの傾向をはっきりと示している。二〇〇八年度に比べ三倍にもなっているのだ。

「疫学的にみると、さほど広範に消費されている麻薬ではないが、健康被害の面で警戒が要されている。というのは、著しく増加してきており、その中毒症状が非常に重いことに加えて、とりわけ社会の最貧困層の間で蔓延しているからである」とブエノスアイレス市の薬物依存症調査センター所長ロベルト・カナイは指摘する。パコの患者に関しては、重度の中毒症状に対す

る処置が必要なだけでなく、社会から疎外された貧困地域で起きる、この薬物に絡んだ暴力によるけがや事故への対応も必要とされている。

「貧者の麻薬」と名付けられたこの薬物は、二〇〇一年の社会経済危機後にアルゼンチンにおいて目立つようになり、このときから他のラテンアメリカ諸国よりはるかに大量に消費され始めた。以来パコは蔓延する一方である。

近年では社会の中流階級にも浸透してきているが、誰もその数を計上したからないほど多くの死者が出ているのは、首都の貧困地域と、ブエノスアイレスを带状に囲む郊外の人口過密地域においてである。

どの街角でも

ブエノスアイレス市南部ロマス・デサモラ区の貧民街ビジャ・アルベルティナの未舗装の通りにクンビアの音楽が響く。窓を開け放った家々から音楽が聞こえる。そこに人が近づき、中にいる人に金を渡しブツを受け取る。よそ者の目にはわからないが、パコの売店はどこにもある。

「ここではみんな知っている。私たちの家の角

にひとつある。すぐそこよ…。よそから買いに来る。集まって、吸って、売って、買うために盗む。みんなこの子たちよ。小さい時からずっと知っていて、今そんなことをやっている」。そう語るのはある十代の子どもの母親であるロサリア（姓は本人の希望により公表せず）である。

イサベル・バスケスもまた、自分自身の話を語ってくれた。彼女の息子のエマヌエルはパコ中毒だったがリハビリを受けると決めたところだった。だが彼は地元ビジャ・ラマドリ地区でのパコの密売人同士の銃撃戦で撃ち殺されてしまったのだ。

「若い子たちはますます攻撃的になっている。あの薬に混ぜるものがどんどんひどくなっているからよ。毒そのものよ」とイサベルはいう。彼女はこの薬物の根絶のために活動する組織「パコとたたかう母たち」の創始者である。

ほんの数週間前、初めてパコの化学的な分析がブエノスアイレス大学で行われた。それによつて、このまさに「致死薬物」の組成が明らかになった。わずか〇・〇一〜〇・〇三グラムの一回分のパコには、コカインアルカロイドのベースにアンフェタミン、ベンジン、酸化物、さらには殺鼠剤のマラチオンまでが混ぜられているのだ。

パコは、コカイン精製の際にできる廃棄物に過ぎない安価な麻薬であるが、価格の面では安さは見せかけに過ぎない。薬物の効果はほんの数分しか続かないので、常習者は毎日二〇回分、

さらにアルコールとともに使用すれば七〇回分も使うようになる。つまり、一日分の吸引に約一四〇ドルも費やすことになるのだ。

手っ取り早く現金を得ようという犯罪が増えているのは、この麻薬をやりたいためなのだという専門家もいる。ここで再び統計数字を出してみよう。ブエノスアイレスの薬物依存症課によれば、パコ中毒者の約七〇％は薬物を手に入れるために盗みを行っている。

抑制不可能なパコ中毒

この麻薬は、使用によって得られる陶酔感が、使用量が増えるに従って短時間しか続かなくなるため、非常に依存症になりやすい。

「パコは火で熱して吸引するという薬物なので、肺の無数の毛細血管から吸収され急速に脳に達する。非常に強い「ハイ」の状態が得られるが、抜けたときの虚脱感も同じように強い」と一四年前から依存症治療に従事している社会学者のイグナシオ・オドネルは語る。

この薬物は中毒患者の身体にすぐに兆候を残す。顕著な体重減少、パイプや煙草に火をつけることで起こる手や唇のやけど、呼吸器の諸症状、そして深刻な神経系への影響である。

最近の公的機関による調査報告によると、アルゼンチンの最も貧しい階層では、麻薬依存症患者のうち半分は日常的にパコを吸引しており、大部分は複数の有害な薬物の「多重常習者」であった。

ブエノスアイレス市の社会開発部の報告書によれば、「この麻薬の使用によって神経系にひどいダメージを受け、重篤な健康状況で病院に運び込まれる子どもや若者が日に日に増えている」という。

危機的状況の医療システム

ではそれに対する対応はどうなっているのか？ 実際には公衆衛生システムはもとより手がいつぱいの状態で、この新しい疫病に対応する余裕はない。

「医師らはこれらの依存症患者を診る用意はできていないし、診たがらない。必要な医薬品もないしトレーニングも受けていないからだ」とオドネルは語る。

「病院の緊急受付では、私たちが連れてくる子どもはしょっちゅう後回しにされている。ひどい差別だ。まず病院に中毒治療のための病床が必要だ。でもそこから処方箋を持たせてリハビリセンターに行けるようにしなくてはならない。でもそれをするのが非常に難しい」と「パコとたたかう母たち」の別のリーダー、アリシア・ロメロは語る。

現状ではすべての患者に対応しきれない。五万人の依存症患者が「待機リスト」にしていると推定されているのだ。アルゼンチンの麻薬予防撲滅庁 (Seatonar) が認めるところによれば、全国で入院できるベッド数は二五〇〇しかなく、需要には遠く及ばない状況だ。

一方ブエノスアイレス市では、二〇〇七年に議決された依存症対策法が施行されれば、新しい救急センターが開設され、貧困地域で移動医療チームが活動できるようになるとしている。

「ここ二年の間に薬物中毒の治療機関はかなり改善された。入院できる治療センターから日帰り病院、また民間機関との提携などもできた。政府の施策に、まさに『最前線で』活動している市民組織を結びつける必要がある。政府だけでは無理なのだ」とロベルト・カナイは述べる。だがしかし増加する麻薬問題を解決するには、その背景にある問題を解決する以外に方法はないと多くの人が口をそろえる。つまり貧困と社会的な疎外を根絶することである。パコの問題はおそらく貧困問題の病的徴候のひとつに過ぎないからだ。 (訳＝山本昭代)

http://www.bbc.co.uk/mundo/america-latina/2010/07/100623_1230_argentina_drogas_paco_wbm.shtml

「ペルーで活躍する日系人音楽家たち(1)」

ペルーはラテンアメリカ第二の日系人居住国であり、国策として明治以降最も早く日本人移民が組織的に行われた国でもある。一八九九年、日本を出発した最初の移民船佐倉丸が約八〇〇人の日本人を載せてリマのカヤオ港に到着した。その多くはペルー各地の農園で働く労働者としての入植だった。しかし、その労働は過酷を極め、多くの死者が出、また逃亡者も多く出た。次第に彼らは首都のリマへと移住し、路上の散髪屋などから身を起こし、多くの成功者を出した。一九二〇年代までに二万人以上の移民がペルーへと渡った。一時、リマ市の北に位置する港町カヤオでは、五〇人に一人は日本人というほどの状況であった。一時的な出稼ぎの気持でペルーで生活していた入植者たちは、いずれ日本に帰るつもりだったため、ペルー社会と溶け込もうとせず、彼ら独自の社会を作って生活してきた。そのことから多くの摩擦も起こり、第二次世界大戦前には、ペルー国民の政治的不満へのスケープゴートとして排日運動が加熱していった。やがて第二次世界大戦が始まると、

連合国側であるペルーは日本人の財産を没収し、移民の多くはアメリカへと強制的に送ら

れた。戦後、幾多の苦労を経て再びペルーに戻ってきた移民たちは、ペルーで生きていくために、ペルーへと歩み寄る生活へと徐々にスタイルを変えていったとも言われる。

こんな波乱万丈の日本人移民たちの中からも多くの音楽家が生まれている。日本では殆ど知られていないことだが、中にはペルー人なら知らぬ人はいない、というほどのスターも何人も登場している。前置きが長くなったが、こうしたペルーで活躍した日系人音楽家たちを何回かに分けて紹介していきたいと思う。

日系人スター、といっても様々な音楽ジャンルに渡っているので、誰から紹介するか悩むところであるが、日本人にも馴染み深いアンデス地域で活躍した音楽家に今回は焦点を当てて紹介しよう。

まず、一人目は、アンヘリカ・ハラダ・バスケスさんだ。といっても、ペルー人にこの名前を言ってもピンと来る人は少ない。ところが彼女の芸名、プリンセシタ・デ・ユンガイ(ユンガイの歌姫)をあげると、誰もがああ彼女か、と知っている。彼女はペルーのアンデス音楽を代表する忘れてはならない大歌手の一人となっている。

アンヘリカは、一九三八年にペルー北部アンデスのアンカシユ県ユンガイ郡に生まれた。アンカシユの象徴であるワスカラン山と



ヤンガヌーコ湖に程近い農園で母フアナ・バスケスと幼少を過ごした。父のいない家だった。彼女の自伝によると、子供の頃は、父のことは尋ねてはいけないう暗黙の了解があり、ずっと聞けなかつたという。かなり大きくなった頃、ついに意を決して母に父のことを尋ねると、父は中国人で死別したと教えられた。ところがある時、父が日本人でも生きていたという話を父のことを知る日系人から聴き、母を問い詰める。初めは否定していた母も、やがて実はそうだと認め、初めて彼女は自分が日系人であり、父が生きていたことを知り、無事再会することができた。それ以来、彼女は自分の姓にハラダを明記している。

元来歌うことが好きだったアンヘリカは、十六歳の時に初めてユンガイにあるワスカラン劇場で歌ったという。十七歳で結婚し二人の子供を出産。十九歳でリマへ移住し、お針子を始めた。ところが、あるTVの音楽番組「勝利への階段」コンクールに出場したことがきっかけで、一年間の修行期間を経て一九六〇年十一月に国立闘技場にてロス・パリアス・デ・アンカシユと共に「ユンガイの

歌姫」の名でデビューを果たした。それ以降、彼女はペルーを代表する歌手へと変わったのである。一年間の修行期間には、実はとなりのフニン県ハウハ出身の日系人マキノ・モリとのワイノの歌をみっちり練習し、デュオでデビューするはずだったそうだが、マキノ・モリが伸び悩み脱落、結局彼女はソロでデビューすることになったらしい。同時期に日系からプリンセシータ・デ・ワラルもデビューしているというが、残念ながら彼女についての情報は無い。

彼女がデビューした一九六〇年代は、ペルー音楽が盛り上がった黄金時代だった。アンデス音楽も、フロール・プカリーナ、エル・ヒルゲロ・デル・ウスカラン、ピカフロール・デ・ロス・アンデス、パストリータ・ワラシーナなど数多くの大スターが活躍した時代だ。その中で、プリンセシータ・デ・ユンガイは、ペルーのワイノ音楽を代表する大スターとして活躍した。ワイノのリズムにのせて故郷に錦を飾るために都市へ出てきた人々に故郷の息吹きを届け続け、多くの人に愛された歌手となった。

また、彼女は一九六七年度より日秘文化センターなどで日系人社会に向けても歌い始め、八五年以降はリマの学校や日系文化センターでアンデスの音楽や踊りを教えた。ペルーの有名雑誌の日系人特集では表紙を飾る

など、日系を代表する音楽家としてその名を馳せた。七六年にはリマまでフジテレビが彼女の取材に来た。そしてついに九〇年には悲願の来日を果たし、東京と故郷である福岡でコンサートを行った。ちなみに海外公演は日本だけでなく、ヨーロッパやアメリカなどでも行っている。代表曲は「トード・セ・プエデ・オルビダル」。艶のあるアンカシユ地方特有の伸びやかな歌が持ち味だ。スペイン語、ケチュア語だけでなく、日本語でも歌える歌手、ということになっているが、彼女の日本語の歌は、かなりたどたどしさを感じる。日系人だと知らずに育ったことを考えると納得が行くが、それでも日本語で歌おうという彼女のその心意気が素晴らしい。

ずいぶんと余白がなくなったがもうひとりでだけ日系人音楽家を紹介しよう。ペルーを代表する伝説の楽団と言われたリラ・パウシーナでギターを担当していたルイス・ナカヤマ・アクーニャだ。日系移民の父と北部アンデ



スのアンカシユ出身の母の間に生まれ、八歳で父と死別。その後南部のアプリマック県で育ったという。

一九五〇年にアヤクーチヨ県南部のパリナコチャスで結成されたワイノ楽団リラ・パウシーナにギターで参加。五二年にこの楽団を有名にすることに成功するチャランゴ奏者のハイメ・グアルディアが入って以来、ヒット曲を多く生み出しリラ・パウシーナの人気は高まっていった。彼らは各地でアンデス音楽関係の賞を数多く受賞した。メンバーの若干の変遷を経ながらも、さらに六五年にはチリ、六七年にベネズエラ、七〇年にはブラジルとアルゼンチン公演を成功させるなど、ペルーアンデス音楽史に残る名バンドとして高い評価を獲得した。

七七年には、ペルー文化使節インティの一人として、ルイス・ナカヤマ・アクーニャはハイメ・グアルディアとともに来日している。ハイメ・グアルディアとともにペルー文化庁の国立民俗芸術学院の教授を勤めたりもしたようだ。来日時は、日系人が参加していると話題にもなったようであるが、私が生まれた頃のことだ。当時の雰囲気は雑誌等のレポートでしか知ることが出来ないのが残念だ。

そんなこんなで少し長くなってしまったが、次回以降もアンデス以外の海岸地域やロック、ボレロなどのジャンルで活躍した日系人音楽家を紹介していくのでお楽しみに！

ムール貝のワインとレモンのソース味 MEJILLONES EN SALSA DE VINO Y LIMON



●材料 (4人分)

- ・ムール貝 (生か冷凍) 32個
- ・甘口の白ワイン 2カップ
- ・パン粉 それぞれのムール貝にスプーン1杯ずつ
- ・レモン果汁 1個分
- ・オリーブオイル 大さじ6杯
- ・ニンニクペースト 大さじ2杯
- ・乾燥パセリ ・塩
- ・コショウ ・フランスパン ・バター

●作り方

- (1) ムール貝を洗う
- (2) オリーブオイルでニンニクペーストを炒める
- (3) 炒めたニンニクのなかにムール貝を加える。
- (4) ワインとレモン果汁を入れて、塩とコショウで味を調える
- (5) フライパンに蓋をして、ムール貝が開くまで弱火で加熱する。貝をとりだして、ワインソースのなかにパン粉を加え、ペースト状になるまでよく混ぜる。
- (6) 大きめの平皿にムール貝を置いて、それぞれの貝のなかに、ペースト状になったパン粉を入れる
- (7) パンを薄切りにして、バターを塗ってトーストする。
- (8) ムール貝の上に乾燥パセリをふりかける
- (9) 白ワインといっしょにどうぞ

ミゲル・アクーニャ メキシコで中学・高校の英語教師をしたあと、1986年に来日。「FM COCOLO」でDJをつとめた。大阪・天満で「メリダスペイン語教室」(<http://www.merida-mex.com>) 主宰。メキシコ料理店を開くため、準備中。

今回は、ムール貝をつかった料理を紹介したい。

ムール貝は二枚貝で、浅い海の岩に付着して生きている。最大の産地は中国で、スペイン、オランダ、イタリアがそれにつづく。米大陸ではチリが有名だが、大半は輸出されている。天然物は世界の漁獲量の一八%にすぎず、残りの八二%は養殖だ。

メキシコでは、西部ではふつうのムール貝である *Mytilus Edulis*、バハ・カリフォルニアは *Mytilus*

Californianus、メキシコ湾は *Brachidontes recurvus*、カリブ海では *Mytilus Exustus* がとれる。米大陸のほかの国々でもムール貝は食されており、ペルーには *Choromytilus Chor* という体長二〇センチにもなる巨大な種類がある。

かつてマヤ人は、スープにしたり焼いたり蒸したりして、野菜やトマトソース、魚などと一緒にムール貝を味わっていたが、メキシコに到達したスペイン人がもた

らした米やオリーブオイル、レモンなどの食材は料理法を一変させた。

私の実家では、米やインゲン豆(フリホール)、トマトソース、ウスターソース、アボガドのソースなど、さまざまな料理と組み合わせせて食べた。日本では、パエリヤが有名だ。

ムール貝は大きな百貨店で入手できるし、私は業務スーパーで冷凍品を仕入れてさまざまな料理を楽しんでいる。

ニュースクリップ 2010年9月

▣ペルー アマゾン先住民族が政党を設立

2009年にペルー、バグアで起きた先住民族蜂起から一年余り、アマゾン先住民族は独自の政党を設立し、抗議運動のリーダーであったアルベルト・ピサongoを2011年の大統領候補として立候補することを表明した。ペルーでアマゾン先住民の最大組織であるペルー・アマゾン地域の先住民組織協会(AIDISEP)はその会見で、先住民族のためだけの政党ではなく全国レベルでの政党を目指すことを強調した。現在、政党登録のための署名を集めており、ピサongoは大統領候補になる用意があることを示唆した。2009年の7月に起きたペルー北東部バグアの先住民族蜂起では34人の死者(うち24人が警察官)が出て、ペルー司法当局はピサongoを虐殺の首謀者として告訴した。事件後、ピサongoはニカラグアに一年間亡命したが事件一周期の数日前に帰国し、事件を扇動したことを否定し、告訴を拒否した。そして新しい政党は「ペルー市民全体に帰属する資源やアマゾンの防衛のための政治的手段になるだろう。」と述べた。

(BBC Mundo 2010/08/12より)

▣コロンビアと米国の軍事基地に関する協定は憲法違反

コロンビアの憲法裁判所は2009年10月30日にアルバロ・ウリベ前政権が米国と締結した軍事基地に関する協定を憲法違反とした。この協定はベネズ

エラ・エクアドル・ボリビア・コロンビアなどの近隣諸国との間で物議を醸していた。憲法裁判所は、同協定は90年代に米国と締結した軍事協定を延長したものともみなすことはできないという判断をした。「つの軍事基地使用はプラン・コロンビアの既成の軍事協定ではなく、新たな協定と認定し違法としたが、他の軍事協定に関しては有効であるとし、米軍兵士500人と米国人300人については麻薬密輸組織や対ゲリラ戦のために駐留することを認めた。コロンビア政府は裁判所の判決を受けられ、新たな協定であれば議会の承認が必要ことから、議会の承認を得るよう提出される見通しである。与党は議会でも多数派であることから、提出されれば承認されるだろうと見られている。

(BBC Mundo 2010/08/18より)

▣エルサルバドル 麻薬密輸にからむ大量の現金が発見される

麻薬密輸を捜査していたエルサルバドル警察は首都近辺で大量の現金が入ったプラスチック容器をいくつも発見した。中には50万ドル以上のドル紙幣が入ったものもあった。警察は麻薬密輸に絡む現金とみている。エルサルバドルにはマラスと呼ばれる暴力組織が跋扈しているが、これらの暴力団は中米で勢力を持つメキシコの麻薬カルテルと関係を持ち地元の密輸を担っているとみられている。これらマラスのメンバーはグアテマラの密林で麻薬カルテルから軍事訓練を受けているという。今年に入ってから、上納金の支払いを拒否したバス運転手が100人以上もマラスによって殺されている。マウ

リシオ・フネス現政権はマラスを取り締まるための新法を制定しようとしているが、これを阻止するためにマラスが国内主要道路を数日間封鎖するという事件も起こっている。

(BBC Mundo 2010/09/11より)

▣ブラジル 貧困政策で成果

さる8月8日、ブラジルのルイス・イナシオ・ Lula大統領はブラジルは2014年には国内から極貧層がなくなるであろうという大胆な宣言をした。10月8日の大統領選を前にして、与党労働党がさらに政権を担うであろうということを前提とした発言のようだが、統計は大統領の宣言を裏付けている。Lulaが大統領に就任した2003年ブラジルの人口1億9千万人の12%が極貧層(1日1ドル以下で生活)だった。それが、今日では4.8%に減少しており、2000年から2015年までの15年で世界の極貧人口を半分にするという国連の新世紀開発目標をすでに達成しているからだ。貧困層は2003年の53.7%から2007年には28.8%に減っており、6千4百万人が貧困から脱却したことになる。貧困対策は歴代の政権が行ってきたが、Lula政権になって、ブラジル全世帯の9分の1を対象にしたボルサ・ファミリア(貧困家庭に子どもを学校にやることを条件に毎月40ドルから100ドル支給するプログラム)を中心とするアンブレ・セロ(飢餓ゼロ)政策を推進して目に見える成果を出しているもの。

(Noticias Alíadas 19/08/2010より)

**** Información ****

お知らせ

◆第6回ブラジル映画祭 2010◆

2010年10月9日～15日 東京／ユーロスペース

2010年10月16日～22日 大阪／シネ・ヌーヴォ

2010年10月23日～29日 浜松／シマネ・イーラ

2010年11月(日程未定) 京都／京都シネマ

詳細は <http://2010.cinemabrasil.info/>

入場料:大人 1500円(当日)／1300円(前売) 小人料金等の割引もあり。

◆第7回ラテンビート映画祭◆

2010年10月8日～11日 横浜ブルク13(TEL045-222-6222 最寄駅:桜木町駅)

詳細は <http://www.hispanicbeatfilmfestival.com/>

入場料:大人 1700円(当日)／1500円(前売) 小人料金等の割引もあり。

◆国際ふれあい広場 2010 in 高知◆

日時:10月16日(土)・17日(日)

16日【RKCホールにて 13:00～17:00】紺野美沙子氏講演会・中学生弁論大会

17日【ひろめ市場にて 10:00～17:00】民芸品販売・飲食・踊りなど

(グアテマラ生産者支援ネットワーク「みるば」も出店します。)

主催:高知県国際交流協会 (TEL088-875-0022 <http://www.kochi-kia.or.jp/>)

お知らせコーナーについてですが、そんりさは隔月発行となっており、〆切は奇数月の10日となっています。情報掲載ご希望の方はお早めをお願いします。リアルタイムでブログにて情報発信も行っていますので、こちらもご利用ください。

【ブログはレコムのHP <<http://www.jca.apc.org/recom/>> よりどうぞ】

会費について

会費期限は「そんりさ」をお届けする際の封筒宛名ラベルに印字しております。期限が来ましたら、事務局よりお知らせを同封しますので、お早めの更新をお願いいたします。

事務局短信

★そんりさの発送作業は主に京都にて。毎回、楽しい会になっています。終了後には一緒に食ったり、飲んだり。ぜひぜひお近くの方はお気軽にご参加ください！

★レコムではご自宅近くのイベントなどで民芸品を売ってくださる方を募集中！売上はグアテマラ基金に寄付されます。出店料・送料などの実費はレコムが負担します。

★電話は常時留守番電話となりました。伝言を残しておいて頂ければ、こちらより折り返しご連絡いたしますので、よろしくをお願いいたします。

**** ** ** ** ****

初秋、韓国はソウル郊外にある「ナヌムの家」を訪ねました。旧日本軍によって性奴隷とされた女性たちが暮らす分かち合いの家（社会福祉法人）です。ここで村山一兵さんという29歳の日本人男性に出逢いました。彼は、併設された歴史資料館の研究員という立場でハルモニたちの老いに寄り添い暮らし、本当に身を粉にして働いておられました。訪ねた日は、日韓それぞれの学生が大勢見学を訪れていて、彼はハングルと日本語を巧みに操りながら凄まじい史実を誇張なく淡々と、そして丁寧に説明しておられました。

なぜ一兵さんはここに居るの？の問いに「通り過ぎることができなかったから」。そして「ここに通ううち、何かを学んで帰りたいとやってくる人とハルモニの間に立って繋ぐ存在が必要だと思った」。グアテマラ民衆法廷のきっかけとなったおばあさんたちにお礼が言いたい。そんな想いで出た旅は、日本市民としての見事な「仕事」に触れる旅でもありました。こうして生まれる確かな繋がりの一つひとつが、確かな未来をつくるということなのかもしれない。（安藤栄里子）

次回の『そんりさ』の印刷・発送作業は **12月（土）**の予定です。参加いただける方はご連絡
ください。

大変な作業も、みんなで作れば楽しくあつという間にできてしまいます。

レコム・メーリングリスト参加のご案内：会員、講読者は無料で参加できます。登録したい方は
E-mail : recom@jca.apc.org までアドレスを連絡下さい。

ホームページのご案内 レコムのホームページがどんどんリニューアル！
<http://www.jca.apc.org/recom/>

『そんりさ』バックナンバーの紹介

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| Vol.126 エクアドル・フェアトレード | Vol.122 グアテマラ視察報告 |
| Vol.125 ポリビア気候変動世界会議 | Vol.121 ペルー先住民族の最近の動向 |
| Vol.124 ハイチ特集 | Vol.120 コロンビア 慢性化した紛争 |
| Vol.123 やより賞記念ツアー報告 | Vol.119 ナルコメヒコ メキシコの麻薬 |

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。

入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。

レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

- ☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク
- ☆会員 年 8,000円（学生 5,000円）…会の運営、総会での投票、『そんりさ』資料閲覧・貸出
- ☆賛助会員 年 10,000円（一口）…資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加
- ☆『そんりさ』購読者 年 4,000円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒616-0004

京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556（留守電）

☺お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。7

<レコム口座>

404, 265円

<グアテマラ基金>

322, 593円

(2010年9月現在)